

## はじめに

豊田 都峰

俳句結社誌「京鹿子」は平成十九年十二月号をもって通巻一〇〇〇号に達した。大正九年十一月創刊以来のことである。そして、その記念誌として『京鹿子一〇〇〇号記念誌』を出版した。

平成十六年に一〇〇〇号記念事業計画が検討され記念誌をまとめてゆくことになり、その実務を担当してくれたのが、高木智である。その時点で多くの纏めがいろいろあったにしろ、五百頁にも及ぶ『記念誌』を成し遂げられたのは、高木智が中心にしてくれたこそである。

平成八年、初代主宰鈴鹿野風呂・神麓居跡に「京鹿子会館」を建設すると、京鹿子二代目主宰丸山海道が発議、多くの協力を得て平成九年三月三〇日に竣工した。畳座敷の主宰室・句会場。椅子式の句会場が三室などの規模であるが、特筆したいのは、「俳句の図書館」の設置である。野風呂師の残された膨大な俳句的資料、いろいろな結社誌の揃い、一茶の書画軸、俳人の色紙短冊、手紙やハガキ、投句用紙などなど、また寄贈された品や墨跡、書籍、すべて箱詰め状態になっていたのを、書棚や所蔵棚に鮮やかに整理整頓をしてくれたのが高木智であり、晶子である。聞けば大学図書館の司書の職歴を持っている高木智である。

京鹿子の資料はすべて高木智により、系統的に整理されたと言つて過言ではない。本当に惜しい人を亡くしたものである。

高木智は俳句の関守である。

彼の側を通る時は、俳句・俳文など何か俳句に係わるものを、通行手形を示さないと通してもらえない。もし示さないと追いかけてきて示すことを要求されかねない。それほど俳句的な資料収集に熱心であった。高木智がたいへん尊敬していた野風呂師に

節分の句の関守りて老いにけり

の作品がある。高木智はまさしくその心を受け継いだのである。

この度、智夫人晶子が、『京鹿子叢書断章』として出版したいと言つたことで一文を求められた。

思いも多いが、やはり今書いてきたことが智像の多くを占める。その思いは、『京鹿子叢書断章』を改めて読んで、決して間違つていなかった。単なる解説に終わつていない、まさしく資料を楽しみ資料の価値を評価し、またそれぞれの状況分析・特に成績一覧・回数調べなど、資料を十分活用している高木智を目の前にしているような思いであった。

ここに「京鹿子」の貴重な資料が手近に成つたことを喜び、晶子の智への思いをもあわせ思つて、一文とした。

平成二十六年竹秋のころ

京鹿子叢書斷章

——  
目次

はじめに……………豊田 都峰……………1

- 一 序文の序文——「野風呂序文集」……………7
- 二 京鹿子とその叢書——概説風に……………13
- 三 華麗なる創生期——「京鹿子第一句集」……………19
- 四 作家論序説——「野風呂句集」……………25
- 五 俳壇の青春——二冊の「草城句集」より……………31
- 六 俳壇との交流——「南風」と「より江句文集」……………37
- 七 地道な努力の結集——「播水句集」……………43
- 八 同人誌としての京鹿子——「京鹿子第二・第三・第四句集」——（その1）……………49
- 九 京鹿子の第二期黄金時代——「京鹿子第二・第三・第四句集」——（その2）……………55
- 十 結社を支えた二本の柱——「丹鶴集」と「小鳥網」……………61
- 十一 若き旅への叫び——「浜木綿」から「海豹島」へ……………67
- 十二 野風呂門下の人々——「京鹿子第五句集」……………73
- 十三 野風呂俳句の本拠地——三冊の「嵯峨野集」……………79
- 十四 短冊をめぐって——「節分集」・「柿」（句文集）その他……………85
- 十五 第二の論陣 鑑賞蛇足——句集「海光」・「俳句の手びき」——句集「連翹」……………91

|    |  |     |
|----|--|-----|
| 十六 | 鴛鴦句集の周辺 「二人静」と「笹栗」……………                | 97  |
| 十七 | 叢書の復刊期をめぐる ― 「春灯」・「旅装」・その他……………        | 103 |
| 十八 | 主宰の処女句集 ― 「新雪」……………                    | 109 |
| 十九 | 謝恩と執念 ― 「百句百幅一万句集」……………                | 115 |
| 二十 | 戦争文学としての俳句 「長江」と「雲」……………               | 121 |
| 二一 | 大吟旅に開く詩心 ― 「霧湖」北海道吟旅句集……………            | 127 |
| 二二 | 句会の消長と意義 ― 句集「竜胆」、その他……………             | 133 |
| 二三 | 象徴主義への先鋒 ― 句集「獸神」とその世界……………            | 139 |
| 二四 | 戦後派作家の系譜(1) ― 「雪溪の昼」から「母の声」へ……………      | 145 |
| 二五 | 戦後の作家群像(2) ― 「青嶺 第一句集」……………            | 151 |
| 二六 | 二代の青春 ― 「旅衣」「神祇」「聚景閣漫筆」その他……………        | 157 |
| 二七 | 法恩の句集 ― 「返り花」「法暖抄」「観世音」……………           | 163 |
| 二八 | 先師・戦後の足跡 ― 「さすらひ」「鮎千句」「俳諧日誌卷一、卷二」…………… | 169 |
| 二九 | 復刊以後の神籠集 ― 「蟹」と「大」句集……………              | 175 |
| 完  | 若干の補足……………                             | 181 |

このプレビューでは表示されないページがあります。

## ●京鹿子叢書断章 1

# 序文の序文

——「野風呂序文集」——

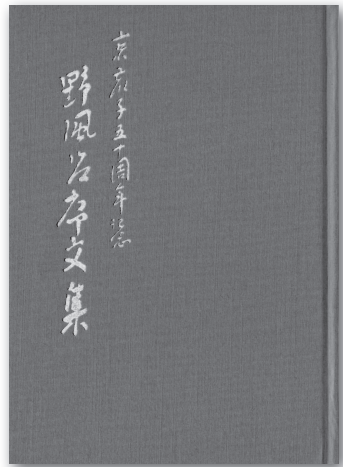
昭和四十四年十一月二十三日、その日は実に京鹿子創刊以来五十周年の記念すべき日であった。その大会席上「京鹿子五十周年記念 野風呂序文集」が発表されたことを聞き、私は「むべなるかな」と、思わず膝を痛いまでたたかずにはいられなかつた。

かねてより、「京鹿子叢書」に目をつけ、ひそかにその意義の深さを自分自身で再確認したいと念じていた私は、それが現在第四十九編で止まっているのを知っていた。そして第五十編は、五十、百などときつちりした数字を好まれる主宰の御性格を考えれば、何らかの形で五十周年記念として刊行されることは自明の理だったのである。

最初、それは「京鹿子歳時記」として世に出るもののごとくであった。そしてそれは着々と進行していたはずであった。もつとも、

すべての京鹿子人が参加し、期待もしている点からいつてこの記念すべき日に刊行されるにまことにふさわしいこの大事業に対して、私にはただ一つ不満がないではなかつた。それは、その事業があまりに大きすぎるために二編に分けざるを得ないという点である。つまり私見によれば、五十周年記念事業として大会当日刊行されるべきものは、ただ一冊、それも京鹿子と京鹿子人にとつて決定的な一冊でなければならず、それは「京鹿子叢書第五十編」でなければならぬと思われたからである。

不幸なことに、その「京鹿子歳時記」が、その事業の大きいさのために、「関係者昼夜の別なく之にたづさわ（野風呂序文集の序）」られたにもかかわらず、遂に大会当日には間に合わないことになつてしまつた。その情報を得たときの私——否、おそらくすべての京



『野風呂序文集』、鈴鹿野風呂著（昭和44年）

このプレビューでは表示されないページがあります。



## ●京鹿子叢書断章 5

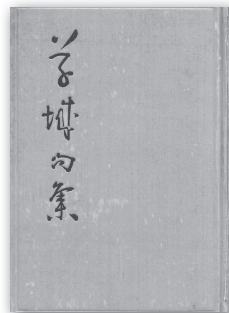
# 俳壇の青春

——二冊の「草城句集」より——

### 一、俳壇ジャーナリズムの覇者

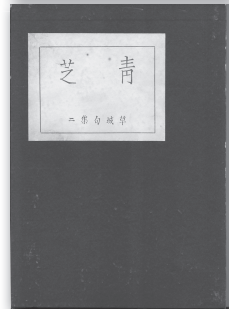
近代俳句史におけるエピソードの豊富さにおいて、草城の右に出るものがないと断言したとして、おそらく異議をほさまれる余地はないであろう。

京城中学時代すでに俳句に指を染めており、三高在学中、神陵俳句会、三高京大俳句会を結成、京鹿子を創刊、はかまをはいて濶歩するところの知識階級、いわゆる「書生俳句」の先駆者となり、御曹子と呼ばれ、若冠十九才にしてホトトギス巻頭をとり、軽妙洒脱の作風でもつて未婚時代すでに妻妾俳句を作りまくり、当時の客観写生一辺倒のホトトギスにフィクションを導入、遂に「ミヤコホテル」十章を「俳句研究」に草するに及んで、犀星をすら論争に巻き



『草城第一句集』、日野草城著

(昭和2年)



『青芝』、日野草城著

(昭和7年)

込み、俳壇のみならず当時の文壇ジャーナリズムを二分するほどの猛拳をやつてのけたのである。しかも新興俳句運動が起こるや、いち早くそれに組し、自らその驍将となつて、数少ないホトトギス同人被除名者の一人となり、晩年許されると共に虚子自身の病氣見舞を受けるなど、記憶に浮かぶものを並べるだけでもきりがない。しかも、それらのあまりにも華々しいデビューは、すべてその若さ、青春性と直接に結びついていた。

この青春謳歌ぶりは、主として京鹿子時代に、その同人達との連帯のなかにおいてなしとげられたのである。今回は、その草城の青春時代、ホトトギス俳壇にとつても若返りの先駆者となつた、いかなれば近代俳句の青春時代そのものを飾るにふさわしい二つの句集「草城句集（花水）」と「青芝」をひもときつつ、草城と俳句と青

このプレビューでは表示されないページがあります。

## ●京鹿子叢書斷章 6

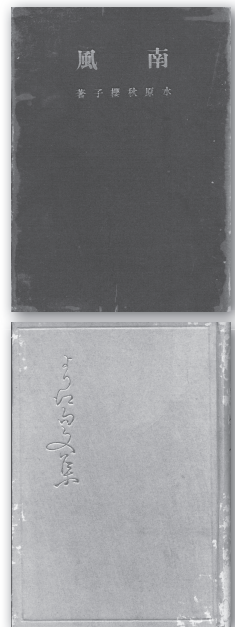
# 俳壇との交流

——「南風」と「より江句文集」——

(一) 京鹿子と客員

本来、三高京大俳句会の鍛錬と発表の機関としてスタートした京鹿子は、その同人、誌友のホトトギスにおける躍進をその当面の目標とした。しかし、草城を中心とする求めてやまぬ若さと活力は、逆にホトトギスからも多くのエネルギーを導入するという結果をもたらした。雑詠研究などもその一つであったが、それ以上に、多くの実力作家や新進たちの注目を呼び、あるいは直接、間接に京鹿子参加をうながすことになったのである。

もともと京都は文化の中心であり、しかもホトトギスの発行所のある東京と、その発祥の地である四国の松山、あるいは実力作家の多かつた九州との交通の要衝でもあるという地の利があり、そこへ京鹿子と鹿笛が同時に生まれたのであるから、当時のホトトギス人



『南風』、水原秋桜子著

(大正15年)

『より江句文集』、久保より江著

(昭和3年)

にとつても、注目せずにはおれなかつたであろう。しかも若い学士たちを中心とした集まりからくる活気は、同年輩の作家にとつては羨望的であり、先輩を自認する人びとには可憐にすら映つた。

当時、ホトトギスや国民俳句以外に発表機関の少なかつた少壮の作家たちは、同人共選の京鹿子雑詠欄に投句し、あるいは感想文を寄せるなど、たちまち誌面を充実させていつた。一方、京鹿子でも彼らのうち実力作家と目される者には、同人、誌友以外に客員制度を設置し、積極的に交流をはかつた。たとえば当時の課題句選者に委嘱した作家に池内たけし、吉岡禪寺洞、岩木躑躅、大橋桜坡子、中田みづほ、皆吉爽雨、中村若沙、安達緑童、佐藤放也、井上落山人などがあり、楠目橙黄子や宮部寸七翁、大岡童男、久保より江、杉田久女なども、折に触れて感想や批評を認めている。つまり、ホトトギスにおける「京鹿子時代」は、単に主宰や草城を中心とする

このプレビューでは表示されないページがあります。

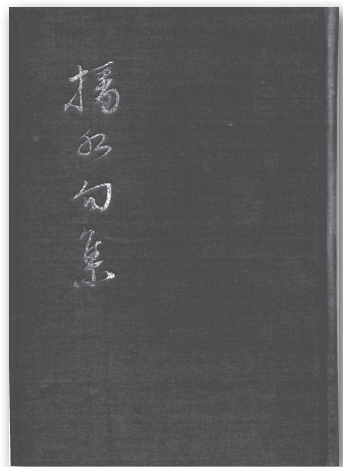
## ●京鹿子叢書断章 7

# 地道な努力の結集

——「播水句集」——

### 一、第三の功勞者

一般に京鹿子が俳壇に云々されるととき、野風呂、草城の名において存在意義が問われるのが常であり、またこの二人を語らずして初期の京鹿子を語るができないのも、誰しも認めるところである。私のこれまでの論考が主として二人に焦点が絞られたのも、いわば当然のなりゆきであつた。しかし、その二人がいかに活躍したとはいへ、京鹿子が同人誌として堂々と存在を主張するに至つた裏には、これまた当然のことながら、他の同人達もそれぞれ並々な努力を営々と続けていた。ことに創生期の京鹿子が、野風呂、草城を頂点に、実力的にはけつして彼らに劣らない秀れた多くの作家を擁することによつてみごとなチームワークをとり、しつかりと基



『播水句集』、五十嵐播水著（昭和6年）

礎作りが行なわれたことは、これまで折に触れて指適してきたとおりである。社会的、経済的な後ろ楯として、若い作家達を存分に働かした白川や紫雲郎、ホトトギス誌上ですでに活躍していた泊月や王城なども、当時の京鹿子を語るには忘れることのできない人達であらう。

しかし、いわゆる学士俳句としての京鹿子を代表する作家としてまた京鹿子はえぬぎの作家として、当時もつとも活躍した人をあげるとすれば、播水にまず指を屈すべきであらう。今回は、大正十三年二月号以来、雑誌の入門欄をずつと担当して直接新人の養成に当たり、また、草城の大学卒業後、社会人としての激務のかたわら、神戸へ転勤移住のため井上北人にバトンをタッチすることになつた大正十四年五月号までの一年間、よく編集の重責に耐え、自らも書

このプレビューでは表示されないページがあります。

## あとがき

『京鹿子叢書断章』は、高木智が「京鹿子」に昭和四十五年四月号から昭和四十八年五月号まで三十回に亘って掲載したものです。

執筆中にこの稿に助言助力を惜しまれなかった鈴木野風呂先師の逝去という痛恨事がありましたが、三年間をかけて多大の資料の分析をしながら書き終えたものです。

ご承知のように「京鹿子」は京大三高俳句会の機関誌として出発、野風呂、草城他四名の同人誌でしたが、誓子、秋桜子等後の俳壇をリードする俊英の巣立った場でもありました。

昭和七年十一月に、野風呂の主宰誌となり、大正から昭和にかけて一大俳句サロンを形成し、当時句集などはよほどの大家でなければ出せなかったものを、率先して出版。次々世に送り出すことを意欲的に行っていました。その辺の事情を叢書を通して書いたものです。

この稿では、京鹿子叢書五十編までを扱っておりますが、その直後に「野風呂歳時記」叢書第五十六篇が丸山海道の編集により、野風呂個人歳時記として捧げられました。ここまで稿を進めたかっと思いません。

丸山海道前師も神麓居跡に野風呂記念館を完成させて、平成十一年に逝去され、豊田都峰現主宰が後

を引き継いでおられます。国文系の主宰が三代続いている事は、「京鹿子」にとっても、子弟にとっても有難い事と言わねばなりません。

平成十九年十二月号で「京鹿子」は通巻一千号に達し、その歴史を満載した記念号を出版いたしました。二〇二〇年(平成三十二年)には百周年になる予定です。

大正九年十一月から始まった「京鹿子」の歴史はこれまで多くの先達により書き、又口伝え続けられて来ましたが、当然とはいえ、多くは鬼籍に入られ、著者の、夫 高木智も平成二十三年それに続きました。

資料でのみしか知り得ぬ事が増え、この『京鹿子叢書断章』が今又その資料の一つとなる事でしょう。

「鈴鹿野風呂記念館」には、野風呂の蔵書や一茶のコレクション、交際のあった各方面の方々の墨跡など、貴重な俳句資料があり、高木智は図書部長としてそれらの整理にあたり、企画展示にも意を注ぎました。

高木は、「京鹿子叢書断章」の連載を終えた昭和四十八年の京鹿子祭に於いて「評論賞」を、平成二十一年には、永年の京鹿子への指導・発展に努力した者に贈られる、「野風呂賞」を受賞。在籍五十年の足跡が残せました。

この連載稿を一冊に纏めておきたいとかねがね思って居た所です。本書は遺稿であるため、最後の章における訂正や加筆はそのままにして直しておりません。資料としてお読み下さる方は、最終章の「若干の補足」は必ずお目通しをお願いいたします。



尚、叢書の番号が重複しているものがあり、便宜上叢書②と表記しております。

「京鹿子」叢書は本書で二百五十五編となりますが、叢書に属さない「京鹿子」人の個人句集や著書の類は続々増え、寄贈による句集等もつぎつぎ収納され、野風呂記念館の「俳句の図書館」はこれからも「資料の宝庫」となりましょう。本書もその棚に並べられます。

ご一読いただければ有難い事と思えます。

最後に、貴重な時間をさいて序文を書いて下さった、豊田都峰主宰、本書刊行にご協力下さった、鈴木野風呂記念館長、海青社の宮内社長に心よりお礼申し上げます。

平成二十六年 清秋

高木 晶子

〒六〇六一〇八〇七

京都市左京区下鴨泉川町三六

このプレビューでは表示されないページがあります。



●著者紹介

高木 智 (たかぎ さとし)

- 昭和10年 京都市生まれ  
昭和31年 京鹿子に投句始める  
昭和35年 第三次京大俳句会再興  
昭和41年 京鹿子同人  
昭和48年 京鹿子評論賞  
同 年 現代俳句協会々員  
平成元年 句集「ベレー」出版  
(京鹿子叢書 第153編)  
平成11年 句集「姫始」出版  
平成18年 関西現代俳句協会理事  
平成21年 「京鹿子」野風呂賞  
平成23年 句集「菖蒲湯」出版

京鹿子叢書 第255編

きょうかのこそうしょだんしょう

京鹿子叢書断章

発行日 ————— 2014年11月11日 初版第1刷  
定 価 ————— カバーに表示してあります  
著 者 ————— 高 木 智  
発 行 者 ————— 宮 内 久



海青社  
Kaiseisha Press

〒520-0112 大津市日吉台2丁目16-4  
Tel. (077) 577-2677 Fax (077) 577-2688  
<http://www.kaiseisha-press.ne.jp>  
郵便振替 01090-1-17991

● Copyright © 2014 ● ISBN978-4-86099-298-9 C0095 ● Printed in JAPAN  
● 乱丁落丁はお取り替えいたします

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。